みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Mexican Americans : Resistance and Creativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000791

あとがき

原稿を修正し終わって、序章から第六章まで通して読んでみたところ、いかにも素描だ、という感をまぬがれえない。しかし、人生には時間の制限もあり、ここで一つの締めくくりとし、次の道への出発点としたい。

各章の元原稿の初出は以下に記したとおりである。私が辿った道が分かってもらえるよう出版年代順にならべ、（　）内に本書内の章数を記入した。今回の収録にあたり、どの論考にもかなりの修正を行なった。

・「危機に立つ民族性と民族文化―ニュー・メキシコ州タオスのスペイン系アメリカ人（イスパーノ）の葛藤」綾部恒雄（編）『アメリカ民族文化の研究』弘文堂、一九八二年、八三―一三八頁。（第三章）

右報告書の英文版は次記の出版物であり、タオスの民族組織体がより詳細に記述されている。

Ethnicity and Ethnic Culture in Crisis: The Struggle for Existence of the Spanish-Americans in Taos, New Mexico. In T. Ayabe (ed.), *Ethnicity and Its Identity in the U.S.A.: A Report of the Field Research in the U.S.A.* (1979). University of Tsukuba: Institute of History and Anthropology, 1981, pp. 33–86.

・「都市の時間と象徴―スペイン系アメリカ人の小都市」中村孚美（編）『都市人類学』至文堂、一九八四年、七九―九七頁。（第四章）

・「チカーノの来た道―その歴史的経緯」『国立民族学博物館研究報告』一四巻一号、一九八九年、一六七―一九八頁。（第一章）

・「メキシコ系アメリカ人と日系人の接触―覚書」『民博通信』七三号、一九九六年、一二―一五頁。（第二章「付

記」）

・「チカノ小説の魅力」『民博通信』七五号、一九九七年、二六―三二頁。（第五章）
・「女性チカノ小説の登場」『民博通信』七九号、一九九七年、四一―四五頁。（第五章）
・「ヒスパニック（ラティノ）のアメリカ―メキシコ系アメリカ人の抵抗文化の形成」『アメリカ史研究』第二一号、一九九八年、二九―四一頁。（序章）
・「チカノ壁画から美術館のための「移動用壁画」へ―メキシコ系アメリカ人の抵抗の表現（素描）」『国立民族学博物館研究報告』二三巻一号、一九九八年、一―三四頁。（第六章）
・「メキシコ系アメリカ人と労働運動―セサル・チャベスの農業労働組合運動を支えたチカノ文化」五十嵐武士（編）『アメリカ合衆国の多民族体制―「民族」の創出』東京大学出版会、二〇〇〇年、一六三―一九〇頁。（第二章）

右の出版物ではスペイン語由来の人名・地名のカタカナ表記に混乱がでてきた。そこで本書ではできるだけスペイン語音を生かし、また音引きを減らす表記をとった。ただしアメリカ合衆国で定着している地名（例えばサンノゼ）などはそれに従った。また文献リスト中、アメリカ合衆国で出版されている書籍で、メキシコ系の人名表記のうちアクセントが抜いてある場合（例えば第二章の［Rodriguez 1991］）は、そのまま転写した。研究者によっては人名も地名もアメリカでのことだから英語読みに統一したらよいという意見もあるが、多くのメキシコ系住民の間ではスペイン語読みが通用していることも事実である。この矛盾自体がエスニックな存在状況を表している。結局、私は表記に完全な統一を行なうことはできなかった。

文部省科学研究費補助金によりメキシコ系アメリカ人を最初に調査したのは一九七六年の夏、アルバカーキ市でのことであったから、すでに二四年が経ってしまった。この間、さらに五回（一九七九、一九九四、一九九七、一

九九八、一九九九年）も同研究費補助金のおかげでアメリカでの見聞の機会をえて、数多くのメキシコ系の人々に会うことができた。ニューメキシコ大学人類学部のカール・シュウェリン教授（Dr. Karl Schwerin）には訪米の度ごとにお世話になった。イスパノ研究者のフランセス・スワデッシュ博士（Dr. Frances Swadesh）からは多くを学ばせていただいた。綾部恒雄筑波大学名誉教授からは右にのべた調査の大半の機会を与えていただいた。そして、国立民族学博物館での共同研究「アメリカ合衆国の多民族性の性格についての研究」（代表 五十嵐武士東京大学教授、期間一九九五―九八年）では諸先生のご発表や質疑応答から学ぶことが多かった。このような経緯をここに記して皆様に深い謝意を表したい。

本書の出版にあたっては一九九九年度出版委員長であった熊倉功夫教授になにかとご配慮をいただいた。藤井龍彦教授、山本紀夫教授、岸上伸啓助教授には原稿段階で貴重なコメントをいただいた。

そして、名輪智子さんには今回もワープロで私の原稿の整理をしていただいた。出版部の豊福絵海子さんには様様な面でご協力いただいた。

この機会に、永年にわたって学恩のある中根千枝先生、大林太良先生、宮田登先生に新たに謝意を表したい。いただいたご教示とご援助のおかげで、私はなんとか研究者としてこの二五年間を過ごすことができたのである。

二〇〇〇年二月九日

黒田　悦子